
月に帰れ、火星人

オルメス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月に帰れ、火星入

【Nコード】

N8549S

【作者名】

オルメス

【あらすじ】

「あなたは宇宙人を信じますか？」

別に、地球外に知的生命体の存在しているか、などという高尚かつありふれた話題について真面目な弁論をしたいわけではない。

「いるかどうかは分からない（いないと思う）が、もしいるのなら会ってみたい」と大体の人が答えるのではないだろうか。

少なくとも、俺はそう考えていた。……あいつ、ナツヒに出会うまでは。ナツヒは本当に遠慮がない。

何かと文句を言ってくるし、ご飯はおかわりするし。説明好きのく

せして説明下手だし。

……あー、思い出すだけで胃が痛い。早く帰ってくれないかな、月に。

「だから私は火星人ですって!」

太陽系異文化コミュニケーションショウコメディ、開幕。

プロローグ（前書き）

「『この物語はフィクションです。実在する人物、団体等には一切関係ありません』……？圭介さん、郵便受けに何か変な紙が入ってたんですけど？」

「どれどれ。……中々に洒落てる投げ込みチラシだな、おい」

プロローグ

季節は、秋。爽やかなこの季節、世間では「スポーツの秋」「芸術の秋」、はたまた「食欲の秋」などといって楽しくすごすのである。

……俺もそんな世間の仲間に入りたかった。
当たり前前の日常を羨む俺の現状はというと、困惑の一言につきる。
……困惑？自分で言うておいて何だが、そんな生ぬるいものではない。明らかに脳の処理限界を超えている。

「（どうしてこんなことに……。神よ、俺はそんなに日頃の行いが悪かったのだろうか？）」

もう一度言おう。

俺、螢火圭介は困惑していた。

今まで信じたことのない神を恨むほど、その困惑はひどいものだ。
……また自分で困惑とか言ってるな。

「……はあ」

「どうしたんですか？ため息なんかつかれて？ため息をつくとき幸せが逃げていきますよ？」

「大丈夫だ。幸せなら絶賛逃亡中だから。すでに閑古鳥が鳴くくらい伽藍堂だから」

「そうですね。それなら安心ですね。もう逃げるほどいないんですから」

「……誰のせいだ、誰の」

「少なくとも私のせいではありませんよね？」

「逆にお前以外の原因言ってみるよ」

「うーんと。季節の変わり目だから、ですか？」

「……はあ」

「どうした」「無限ループは勘弁してくれませんかね!？」……そう
ですか。残念です」

俺の目の前では、『見た目は中学生くらい』、『ウサギの耳
のようなものが頭に生えた』、『火星(自称)』が、『特に苦勞
している様子もなく箸を使い、和食を食べて』いた。……なぜ箸が
使えるのか、などと言った疑問は最早抱かないようにしている。
他の突っ込み所も以下同文。

「……口にするの何回目か分かんないけど、月に帰ってくれないか
な、本当に」

「確か四回目ですけど、帰りたくても帰れないんです!あと私は火
星人です!帰るなら火星ですよ!」

ああ、分かっているとも。

これが現実で、しばらくは受け入れなければならないということ
も。

……それにしても。

「(……本当に、俺が何をしたというんだ……)」

どこで選択肢を間違えたのだろうか。それとも回避不可能なイベ
ントだったのか。

俺は再び嘆息した。

そして、無駄なことと思いつつも、余りに長かった今日という日
を思い出していた。

第一話 ナツヒとの遭遇？（前書き）

「今回から本編がスタートだ」

「この作品には『ラノベのご都合主義』が含まれているそうですよ」

「……ああ、だから俺はこんなに苦労しているのか」

第一話 ナツヒとの遭遇？

..... P P P P P P P P P P P P P P

意識の遥か彼方で電子音がなっている。

..... ああ、もう朝か.....

..... よし。

午前6時00分、いつも通りの時間であることを確認し、起床。
ここから、台所に行ってお湯を沸かし、その間に炊き上がっているご飯をお茶碗に盛って、玄関に新聞を取りに行き、台所に戻りお茶漬けの元を取り出しご飯にふりかけ、ちょうど沸騰するお湯をかけていただき、その後新聞を読む。
慣れてなかったころは大変だったよな、と何度も繰り返してきた一連の動作を特に考えもせずにこなしながら改めて思った。

「何かおもしろそうなニュースは.....と。一面は政治の話しか。政治は.....代わり映えなし、か。今度の首相は何か月持つんだろぅね、ホントに」

そこから経済面、スポーツ面を斜め読みし、ローカル面を開く。

「.....ん？『UFO騒動』？.....ふむ、結構近所.....というかバリバリ徒歩圏内だな」

そこに書かれていたのは、言うてはなんだが月並みな記事だった。

曰く、『日付が変わる頃に原因不明の発光体が観測された』

曰く、『地球上のものとは思えない軌道をしていた』

曰く、『複数の目撃情報があるから信憑性は高い』

……週刊誌の埋め合わせの記事かよ。学級新聞でもよし。

とにかく、ローカル面とはいえ大手新聞社の載せる記事とは思えなかった。

よっぽどネタが無かったのだろうか。

俺としてはこっちの『紅葉、今が見頃』をもっと大きな記事にした方が良かったと思うのだが。このモモジもイチョウもなかなかキレイだ。

とは言つものの…。

「UFO、それに宇宙人か…。」

大学では航空宇宙学を専攻し、将来は宇宙関係の仕事（技師方面で、だ。宇宙飛行士はそもそも視力でアウト）に就きたいと思っている身なので、こういった話題に心が踊らないといったら嘘になる。

「いや、違うな。そんな理由じゃない」

宇宙人。その単語を聞いて俺が思い浮かぶのは『フェルミのパラドックス』と言われるものだ。簡単に言つと「科学的には宇宙人と地球人は接触可能だと期待出来るのに、実際にはそういった地球外生命体との接触はなされていない」というものだが、……まあ、ARIA51の話でもないし、接触出来ていないのは本当なのだろう。

こんな頭でっかちな科学者のようなことは考えずとも『宇宙人』と言われれば皆、何らかのイメージがあるのではないだろうか。自転車で空を飛んだり、放射線の混じった大気の中でしか呼吸でき

なかったり、珪素生命体であつたり、はたまた光の巨人にやられるものであつたり。

とにかく、宇宙人の登場する作品は数多く存在する。それこそ挙げればキリがないほどに。それだけ人類は宇宙人——まだ見ぬ未知のものに惹かれ続けているのだらう。

「……………」

……この記事で童心に帰つたのだろうか。

ダメ出しをしておきながら、内心気に入っていたらしい。

我ながら天の邪鬼な性格をしている。

「いるんだつたら、会つてみたいな、宇宙人」

ふとそんな事をつぶやいていた。

そう、これが子供のころから抱き続けてきた夢なのだから。

俺の原初風景なのだから。

「さすがにタコみたいなのは嫌だけど。グレイ型でも充分喫驚するな、うん。あれ？でも会つても普通の見た目だったら気付かないんじゃない？髪の毛の色がメンデル無視とかでも軽くスルーしそうだよな。……益体もないこと考えてるな、我ながら」

そんな独り言を言いながら時計を見る。

時計は6時45分を指していた。

「ん、いい時間になつたな」

そこから歯を磨き顔を洗い、寝間着から着替え、定期券と携帯

電話と財布をカバンに入れ、ガスの元栓を締め

ぴんぽーん

チャイムの音がした。

「……こんな時間に誰だ……？」

7時前に訪れるような人間に心当たりはないが、しかし無視する訳にもいかずドアを開ける。呼び鈴あるくせにインターホンは無いのはどうかと思う。

「……………」

誰もいない。幻聴か……？この歳で幻聴はさすがに勘弁してほしいのだが……。……否、確かに聞こえたな。すると考えるは……。

「ピンポンダッシュだったのか？」

こんな安アパートに？こんな朝早くから？暇な子供がいるものだ。違う気もするが興味もない。

「まあ、いいか。さて」

そろそろ行きますか、と続けようとして

「お邪魔しています」

聞いたことのない声に遮られた。しかも後ろから……つまり家の

中から声がしたのだ。

勢い良く振り返り、絶句してしまった。

そこには『全身銀色タイツ』の『中学生くらいの少女』が居間に平然と座っていたのだから。

……正直パニックですよ、内心。

第一話 ナツヒとの遭遇？（前書き）

「今回は繋ぎの話なので短めです」

「まあ、内容薄いのは変わらないけどな」

「……そんなこと言っちゃだめですよ、圭介さん」

第一話 ナツヒとの遭遇？

思わずその少女をまじまじと見つめてしまう。

……何だ？この状況？何が起こった？

「初めまして、ナツヒと申します。よろしくお願いします」

「はあ、ご丁寧にありがとうございます。私の名前は螢火圭介とい
います。……って！いやいやいや！普通に挨拶している場合ではな
い！何時からそこに居た！」

空気に流されてお見合いみたいな挨拶をしてしまいましたよ！

「先ほどドアを開けてくれたじゃないですか」

「確かに俺はドアを開けたが、その時には誰もいなかったから入り
ようがないだろ」

「入りましたよ？私が」

「どうやって」

「まあ、その話は後々話すとして。私が何故ここに来たのか聞
かないんですか？」

こいつ、スルーしやがって。

あまりよくないが、まあいい。

乗ってやろうじゃないか。

「その理由とやらを聞こうか」

「しばらく泊めてください」

……状況を整理しよう。

？見知らぬ少女が突然訪問（不法侵入）。

？その少女は全身銀タイツで、よく見たら頭にはウサギのミニの形をした何かを身につけている。

？訪問理由は「しばらく泊めてほしい」とのこと。

……結論。コスプレ好きの家出少女か？最近結構いるらしいからな。……コスプレ好きではなく、家出少女が、だ。

そういったやつが次に言い出すことといえば……。気にしたらヤバいな。無視しよう。

さて、危ない発想を脇に置いておいてっと。こいつの事情なんざ知ったことはないが、一つ確かなことを言わせてもらおう。

「そんな余裕があるように見えるか？この五畳一間台所バストイレ付きに住むただの大学生に」

「不束者ですが、よろしくお願いします」

「聞けて、人の話を」

しかも不束者で。使い方おかしいだろ。

「無いんですか？甲斐性なしですね」

「……あのなあ」

「はい？」

「あるかボケエエエ！」

「きゃっ」

甲斐性なし、の一言で溜まっていたものが一気に吹き出した。

「甲斐性なし」なんて男が言われたくない台詞ベスト3に入るんじゃないだろうか？他の二つはご想像に任せるが。

「ただの大学生のバイトだけでもう一人養えるだけの余裕をどう捻出しろと言っただ！何で突然現れたやつに『甲斐性なし』などと言われなければならない！余計なお世話だ！だいたい何なんだその服は？！銀タイツだと？！昭和の人間が考えた『THE・未来人』みたいな格好しやがって！そしてそのウサミミだ！お前はウサギなのか？月で餅でもついているのか？だったらお前が行くべきはこんな安アパートではなく月だ！月に帰れ！」

「……うう」

「あ、いや、泣かせるつもりはなかったんだが」

年下（に見える）相手に何をむきになっていたのだろう。大人気なさすぎる。冷静になつてみたら自分の無茶苦茶な発言がそうとう恥ずかしいものであることも分かる。何だよ「月に帰れ」って。

「……私、……月に……帰んなきゃいけ……ないんですか？」

「いや、さすがに言い過ぎた。悪かった」

「……酷いです……」

「事情くらい聞くからさ。取り敢えず泣き止んでくれないか？」

目の前で泣かれると罪悪感が半端ない。

……そもそも。何故、自宅で見ず知らずの少女を慰める、などというシチュエーションになっているのだろう？果てしなく疑問だ。

しかしこの疑問は少女の次の発言により、第三宇宙速度で太陽の引力すら振り切り、何十光年もの彼方に飛ばされることになる。

「……私、火星人なのに……」

……は？
今、何と言った？この銀タイツは。

第一話 ナツヒとの遭遇？（前書き）

「今回も短めだな」

「作者さん曰く、『これぐらいをデフォルトにしようかな』だそうですよ」

「……ところで前日も思ったんだが」

「何でしょう？」

「何で俺たちはカメラに向かって意味のないことを呟いているんだ？」

「私もよくわかりませんが、何かこう、使命感に駆られますよね」

第一話 ナツヒとの遭遇？

……オーケーまずは深呼吸だ。
それから圧倒的すぎる疑問点を解消しようか。

「……火星人？今お前火星人と言ったか？」
「はい。……珍しいですね。ここは地球ですから。というよりも私は太陽系第三惑星たる地球に生命がいることに喫驚しているんですよ」

……さつき、さんざん怒鳴り散らした後だからな。大人の対応をしよう。頭ごなしに否定はよくない、きっと。
例えばどんなに電波^{アレ}な発言であつたとしても。

相手を肯定するアイデアその？

俺が勝手に『火星人』と変換しているだけで実は…。

「禾生^{かせい}人？」

禾生は山梨県にあつた村の名前で、今現在は駅の名前に残っているだけです。

「はい、火星人です」

「…禾生出身？」

「しつこいですね、そうですよ」

「…山梨県生まれ？」

「何をどうしたらそうなるんですか？」

違っただけ考えよう。

……他に火星人といたら……。

アイデアその？

「じゃあ……六星占術？」

「確かに六星占術だと火星人居るんですけど！そんな話じゃなくてですね。私は火星から来ました。太陽系、第四惑星、火星からです。分かりましたか？」

……。

匙を投げることを許可しよう、俺。こいつは俺の手には追えない。結論として、だ。

「病院行こうか」

「ものすごく失礼な事いいますね、あなた」

「じゃあ証拠を見せてくれ、証拠を！お前が火星人だという証拠を！」

「……今度は往生際の悪い犯人みたいな態度になりましたね……。証拠ですか？例えばどんなものを見れば納得してくれますか？」

「乗ってきた宇宙船」

「……あー、やっぱりそうなっちゃいます？」

「そうなっちゃうな」

「……実はですね、壊れちゃいまして、宇宙船。だから地球（こゝろ）にいます……け、ど」

「……」

「……」

「……」

「な、何ですかその『こいつ、マジでヤベェ』とでも言いたそうな

目は！」

「おお、正解だ。相手の表情は読み取れるらしいな」

こういったタイプはこっちに被害が及ばない距離から生温かく見守るのが吉だな、うん。動物園的感覚で。

「今物凄く失礼なことを言われた気がします！……ああ、いいですとも！そこまで言うのなら見せてあげましょう！車検を面倒臭いからといって蔑ろにしていたせいでエンストした私の宇宙船を！」
「お、おう」

一気にまくし立てられてしまった。何かがこいつの逆鱗に触れてしまったらしい。俺の『甲斐性なし』と同じようなものだろうか。しかし、ああ言ったということは何かしらのものを見せてくれるということだ。

この電波少女が何を持ち出すか楽しみだ。

急いでいるのにここで引いたら負けだと思えてきたっから不思議だ。

……ん？

……ちよつと待てよ。

急いで（・・・）いるのに（・・・）？
重要なことを思い出し、時計を見る。

午前8時18分

「うお！」

「急にどうしました？」

時間がギリギリ……アウトだな、すでに。しかし今から全力で駅に走れば5分程度の遅刻で済みそうな時間。

慌てて出ていこうとするが、件の電波少女に引き止められた。

「あのさ、急いでるからさ、取り敢えず出てくれない？」

「イ・ヤ・で・す！あそこまでこけにされて『ああ、そうですか』と引き下がったら火星人の名折れです！それによく言うでしょう。」

『目にはジャーマンスープレックスを齒にはフランケンシュタインを』って！」

「言わないし、過激だし、何故か両方プロレス業だし。仮に元の言葉に直しても用法おかしいし」

「隙あり、です」

「あ、ちょ、お前引つ張るな！」

そのまましばらく引つ張られ続けました。

……力、強いんですね。

引きずられた状態で住宅街を歩くとか何の罰ゲームですか、これ。

それにしても周りの視線が痛いな。辺りを見回しているのは目をあわせたくないからですな。気持ちは分かりますよ。銀色電波少女に引きずられる大学生がすぐそばを通っているんですから。

ああ、空が青いなあ。

第一話 ナツヒとの遭遇？

引っ張られて、引っ張られて引っ張られて、ようやく到着したらしい。

計30分超の苦行だった。

え？学校？……諦めたよ。一回休んだ程度で単位が貰えないわけじゃないが、だからといってわざわざサボる必要もなかった。激しく鬱だ。

それは置いておいとくとして、だ。いや置いておきたくはないんだが。

……ここって、今朝の新聞に『UFO墜落予想現場』って書いてあった裏山、だよな？

いや、偶然だ、そうに違いない。二つの物事が連続して起こったからといって、そこに因果関係があるとは限らない。冷静に考えよう。

自称・火星人が自宅に襲来

←

裏山に連行される

←

そこは今朝新聞に載っていた「UFO墜落予想現場」である

「怪しすぎるわ！」

「ど、どうしました急に！？」

ドッキリか！？ 新聞記事を含めて全部ドッキリなのか！？ と
いうかむしろドッキリであってくれ頼むから！

「着きましたよ」

「……ここ？」

ナツヒが指差すその先には、何もなかった。

……不自然に焦げている周りの木々に目を瞑れば、の話だが。

嫌な予感ゲージがすでにメーターを振り切っている。

「ここです」

「……それらしきものは何も見当たらないんだが？」

「認識障害のスイッチ入ってますから」

「認識障害う？」

「そうです。……スイッチ、オフ」

目の前に突然、銀色の金属光沢を放つ物体が現れる。

……フライング・ディスク円盤型つて、いやいやいや。

「ベタすぎるだろ」

なんか、急に冷静になれた。目の前に急に物体が現れたのに、冷静になれた。

人間なにがきっかけになるかわからない。

「ベタをいくなら、あなたは何か起こったのか分からないまま私に
光線銃^{レイガン}で身体に穴を開けられ、絶命してしまう可哀想な第一発見者
ですね」

「……キツイこと言うね」

「まあ、私は見ての通りタコではありませんので、ご安心ください」
「ウサミミだもんな」

「……やけに拘りますね。これはUSaMiMiIです」

「ウサミミなんだろ？」

「USaMiMiIです」

「……ごめん、解説よろしく」

「これは

Ubiquitous

Saturated

Micro

Machinery

Instrument

略してUSaMiMiIです。これは身分証明書かつ携帯電話かつ
リモコンみたいなものでして、まず火星人一人ひとりに固有のUS
aMiMiIが与えられます。これはそれぞれ違った波を出している
ので身分証明になり、またその波を用いることで遠方の相手ともコ
ンタクトがとれるから携帯電話になります。また最近のアップデー
トで電化製品全般を操作出来るようになりました。そもそもこのU
SaMiMiIはかの天才ジョーガ博士によって考案、発明されたも
のであります」

「いや、そこまでで十分だから。そんな歴史とか興味ないから」

「えー、ここから盛り上がってくるのにですか？」

「ああ、興味ないな」

「……」

あ、拗ねた。説明の時、饒舌になったから何かと思っただ、説明

好きなんだな、こいつ。

「まあ、話を戻すとして。信じていただけましたか？」

……ドッキリ成功の看板はまだか。まだなのか。すでに諦めの境地に達しそうだが諦めるな俺。

「もう少し証拠がほしいな」

「どんなものを見せれば納得していただけますかね？」

「逆に聞くけど、あとどんなものがあるんだ？」

「あとあるのは……キャベツの千切りもできるおろし器に、真ん中が赤いフライパンに……」

「……通販で買っただろ、間違いなく」

「ええ、そうなんですよ。あとは……原子変換装置くらいですかね」

「さらりと言うなさらりと。最後のなんだよ最後の！」

「え？ 地球にはないんですか、これ？」

「無いよ！ 少なくとも俺の知る限りじゃ！」

「じゃ、これ証拠でいいですね。さっそく使ってみましょう」

10分後

「……錬金術ってレベルじゃないだろ」

「どんなものですか」

マジで土から金出来ましたよ。金本位制の危機だよ。今違っけどさ。

原理はこいつも知らないそうだ。何でも一企業が独占販売。中身はブラックボックスなんだと。残念だ。

こうなってくると俺の家に侵入した時も認識障害を使用したとかんがえる必要があるな。つまり、それだけ小型で持ち運びの出来る

ものがあるということだ。

そもそもここまで見事な光学迷彩はまだ出来て……いないよな？
俺が知らないだけ、なんて話じゃないよな？今ある情報から考える
と……。

……未だに大がかりな手品の類と考えることも出来るが……。

「……認めるよ。少なくとも地球外から来たということは」

「よし、勝った」

「勝負だったんか」

「優勝商品はお泊り券だと聞いているのですが？」

「誰がいつそんな取り決めたよ」

「私がついさつき決めました」

「清々しいまでに自己中心的だな」

「死活問題です」

「泊めた時のメリット、デメリット」

「お、その気になりましたか？」

「条件による」

「メリットは私が火星の話をたくさん話します」

……まあ、おもしろそう……ではあるな。

いやいや、流されるなよ、俺。

「デメリットは？」

「エンゲル係数が」

「ありがとうございましたまたのご利用はお待ちしております」

「びつくりするくらいの反応で拒否しないでください！」

「死活問題だからな」

「くぬ」

うん、家でもいったけどそんな余裕はない。お金が全く無いっ

てわけではないけど。いくらかは趣味に使ってるし。

「……こうなったら最後の手段です」

「……嫌な予感がしてならないんだが、聞こう。その手段を」

どうも俺の生命の危機な気がしてならない。予感が外れますように。

だが往々にしてこの手の予感は当たるものでありまして。

「『あなたに襲われました』って交番に駆け込みますよ」

「冤罪による社会的抹殺手段キター！」

……テンション上げてる場合じゃない。

洒落にならない手札を相手^{カード}が切ってきた以上、こちらも何か対策を講じなければ。

「あ、あと10秒で決めてくださいね」

「鬼かお前は！」

「いいえ、火星人です」

ああ、あのどや顔をギャフンと言わせたい。考えろ、考えるんだ！この場面を逆転する一手を！

このままじゃ、

泊まるのを拒否する↓警察の御用になる

泊まるのを許可する↓周りの人に万一看つかる↓変態^{ロリコン}のレッテルを貼られる

の二択なようで結果はほとんど変わらない選択肢を選ばなければ

ならないことになるぞ！

「はい、時間です」

「え」

「モノログ中は時間が流れないとも思ってたんですか？」

「そういうメタな発言は謹んでくれませんかね！？」

「それはそうとしまして。結論をどうぞ」

「………はあ。何で俺だったんだ」

「私の火星人的勘」

「………理不尽もここまで極めると、いつそ清々しいな」

………諦めよう。

結論。全力で隠蔽。

少なくともご近所の噂にならないように。

これしかない、というよりはこれしか浮かばない。

………激しく行き当たりばったりな気がするが仕方がない。厄介な
のに目を付けられたとしか言いようが無いな、本当に。

「いいよ、分かった。俺の負けだ」

「よっしゃ二連勝！じゃあ帰るまでの間ですが、よろしく願いします。
………えーっと」

「螢火圭介だ。好きに呼んでくれ」

「ナツヒといいます。よろしくお願いしますね、ケイスケさん」

「……俺としてはあまりよろしくしたくないんだが……」

「む、まだそんな事言いますか。そんなんだから彼女居ない暦〓年
齢なんですよ」

「激しく余計なお世話じゃ！」

………早くも後悔してきた……。いや、でも他に手が浮かばなかつたんだ、しょうがないじゃないか。

いや違うな。正確にはそもそも途中から断るという選択肢が頭の中から消えていた。

まるで思考そのものを弄られたかのようなのだ。

「ブツブツと何を言ってるんですか？……あ、もしかしてフランケンシュタイナーよりも神田地獄の方が好きでしたか？」

「今更そんなところに突っ込みは入れん！あと競技が急に腕相撲になっただな、おい」

「突っ込み巧いんですね、ボケがいがあります」

「……俺としては何故そんなにも地球について知っているのか気になるのだが」

「その話は追々話しますよ」

「……………はあ」

どのみちこいつとはしばらくの付き合いになりそうだ。さっさと他のことを考えるか。

こうして『俺』蛍火圭介と、『火星入』ナツヒとの第三種接近遭遇は、俺が一方的な被害を受ける形で終わった。

第一話 ナツヒとの遭遇？（後書き）

初めましてのかた、初めまして。他の作品を知っているかた、いつもありがとうございます。

作者のオルメスです。

このたび、オリジナル小説を書きはじめました。

遅筆かつ駄文ですが最後までお付き合いいただければ、一素人作家として無上の喜びを感じます。

どうぞ、よろしく願います。

……なんと本文に比べ堅苦しい後書きか。我ながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8549s/>

月に帰れ、火星人

2011年10月7日16時35分発行